

前方後円墳の理解

ー規模・地域展開ー

白井久美子

はじめに

前方後円墳は、日本独特の王陵の形態である。それはまた、ヤマト王権の象徴でもあり、前方後円墳が日本各地の豪族の墓として採用されていく過程は、王権の勢力拡大の軌跡を最も端的に表している。一方、前方後円墳が出現する古墳時代は、日本が東アジア世界の外交を本格的に開始した時期であり、前方後円墳の出現は激動の時代を象徴する出来事であったともいえる。

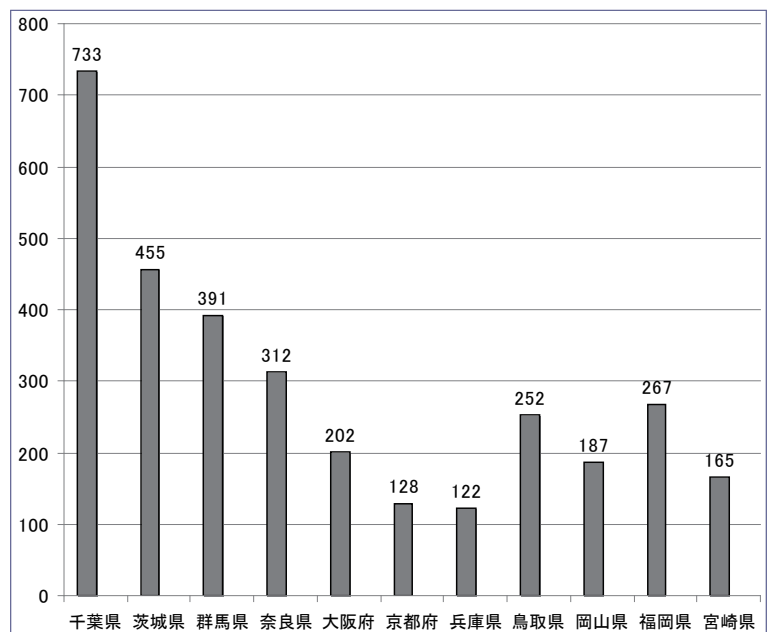
また、長い間、前方後円墳の研究は、箸墓古墳や大仙古墳（仁徳陵古墳）などに代表される近畿地方の巨大な墳丘や埋葬施設、豪華な副葬品を対象に進められ、地方の前方後円墳の情報が全国的に伝わることはほとんどなかった。

ところが、1991年～2000年にまとめられた全国の前方向後円墳集成の結果によって意外な事実が浮かび上がった。その集成を監修した近藤義郎氏は、はしがきで次のように述べている。「日本全土のうちでもっとも数多くの前方向後円墳が作られたのは千葉県であり、それは奈良県の約2.5倍、京都府の約6倍の数という事実の解明は、これまでの理解を大きく変え、前方向後円墳とはなにかを考えるひとつの手掛かりとなる。」

特に、関東地方の前方向後円墳の盛衰は、近畿地方とは大きく異なる。近畿地方で前方向後円墳の巨大化が進む前期には、関東では「前方向後方墳」を豪族の墓に採用し、近畿地方で大型前方向後円墳を作らなくなる後期の6世紀後半以降になって盛んに大型前方向後円墳を築造している。千葉県はその代表的な地域であり、このことが全国一多い前方向後円墳を創出しているのであるが、関東地方にとって前方向後円墳の築造とはどのような意味をもっていたのか、改めて検証することにしたい。

1. 前方向後円墳の数（第1表）

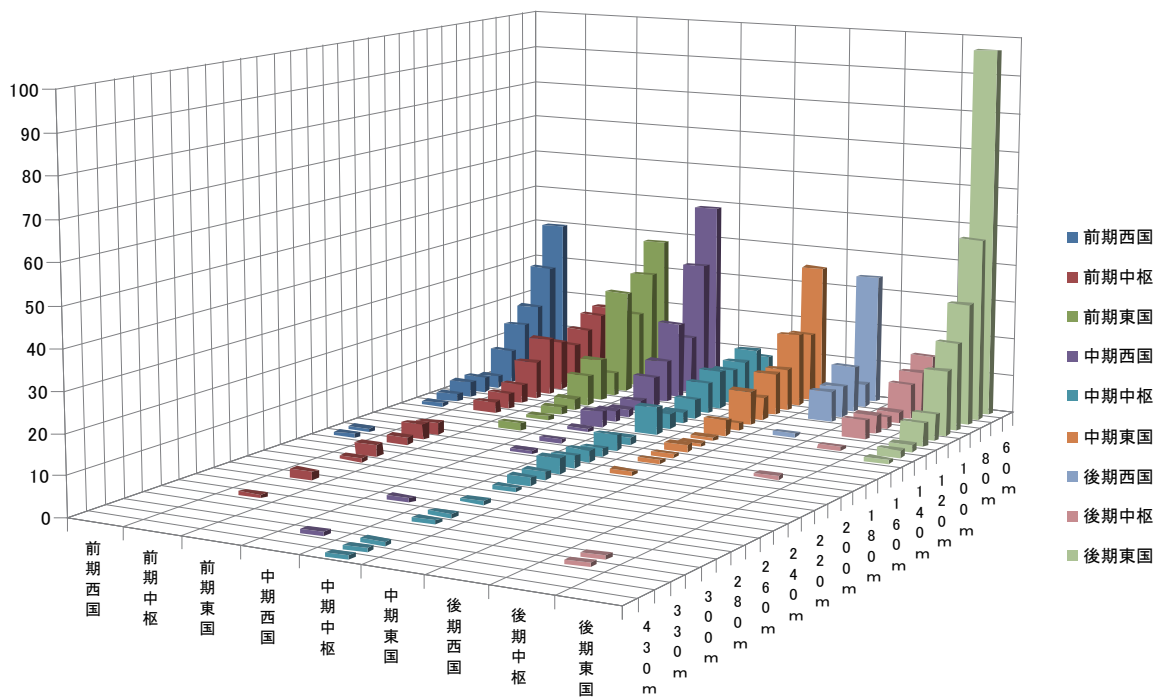
前方向後円墳は、2000年の時点で全国に約4,700基確認されているが、上位3県はいずれも関東地方で、その合計は1,579基（34%）におよぶ。一方、近畿地方の上位3府県の合計は642基（14%）にとどまる。また、中国地方では旧伯耆国に際だって多く、山陰地方で確認された約400基のほとんどが旧因幡・伯耆・出雲に所在するため、必然的に鳥取県に集中している。その



第1表 前方向後円墳の数

（『前方向後円墳集成』1991～2000、『大和前方向後円墳集成』2001より）

規模 / 時期・地域	前期西国	前期中枢	前期東国	前期西国 前方後方	前期中枢 前方後方	前期東国 前方後方	中期西国	中期中枢	中期東国	後期西国	後期中枢	後期東国	計
60m	40	18	38	2	11	30	49	9	35	34	14	97	377
70m	28	18	30		4	5	34	12	18	6	11	48	214
80m	19	14	20	1	1	5	15	10	19	12	9	32	157
90m	14	12	27	2	2	4	20	9	11	8	3	23	135
100m	8	14	6			1	11	10	11	8	3	17	89
110m	3	15	11		1	2	8	8	6		5	7	66
120m	4	10	8		1		3	5	9		5	6	51
130m	4	5	3		1	1	2	3	2	1		2	24
140m	1	5	2				3	4	4		1	2	22
150m	1	3	1		1		4	7	1			1	19
160m							1		1				2
170m			2		1			2	2				7
180m					1		1	4	1				7
190m		3						2	1		1		7
200m		5					1	3					9
210m		3						3	1				7
220m								4					4
230m		3						2					5
240m		1						2					3
250m								1					1
260m													0
270m		2						1					3
280m							1						1
290m								1					1
300m		1						1					2
310m											1		1
330m											1		1
360m							1	1					2
430m								1					1
510m								1					1
	122	132	148	5	24	48	154	106	122	69	54	235	1219



第2表 時期別の大型前方後円墳 (2012. 4 のデータによる)

数は、古墳時代を通じて別格の大規模古墳を築いた岡山県（旧備前・備中）を凌いでおり、ここにもまた別の原理が働いていると思われる。九州地方では、約 560 基の半数近くが福岡県に在り、宮崎県と合わせて約 8 割が 2 県に集中している。半島に近い北部九州と瀬戸内海に通じる日向灘に偏在するといえる。

2. 時期別の大型前方後円墳

墳丘長 60 m 以上の大型前方後円墳の時期別分布を示したのが第 2 表である。時期区分は前期・中期・後期に大別し、出現期の例は前期に、終末期の例は後期に含めた。大型前方後円墳の年代観については、出現期新段階を 3 世紀前葉、前期を 3 世紀中葉～4 世紀中葉、中期を 4 世紀後葉～5 世紀末葉、後期を 6 世紀初頭～6 世紀末葉、終末期を 7 世紀初頭～中葉とした。また、ここで王権中枢域（中枢域と略称）としたのは奈良県・和歌山県・大阪府・京都府・滋賀県域と兵庫県の旧摂津・丹波、福井県の旧若狭を加えた地域である¹⁾。その西側を西国、東側を東国とした。

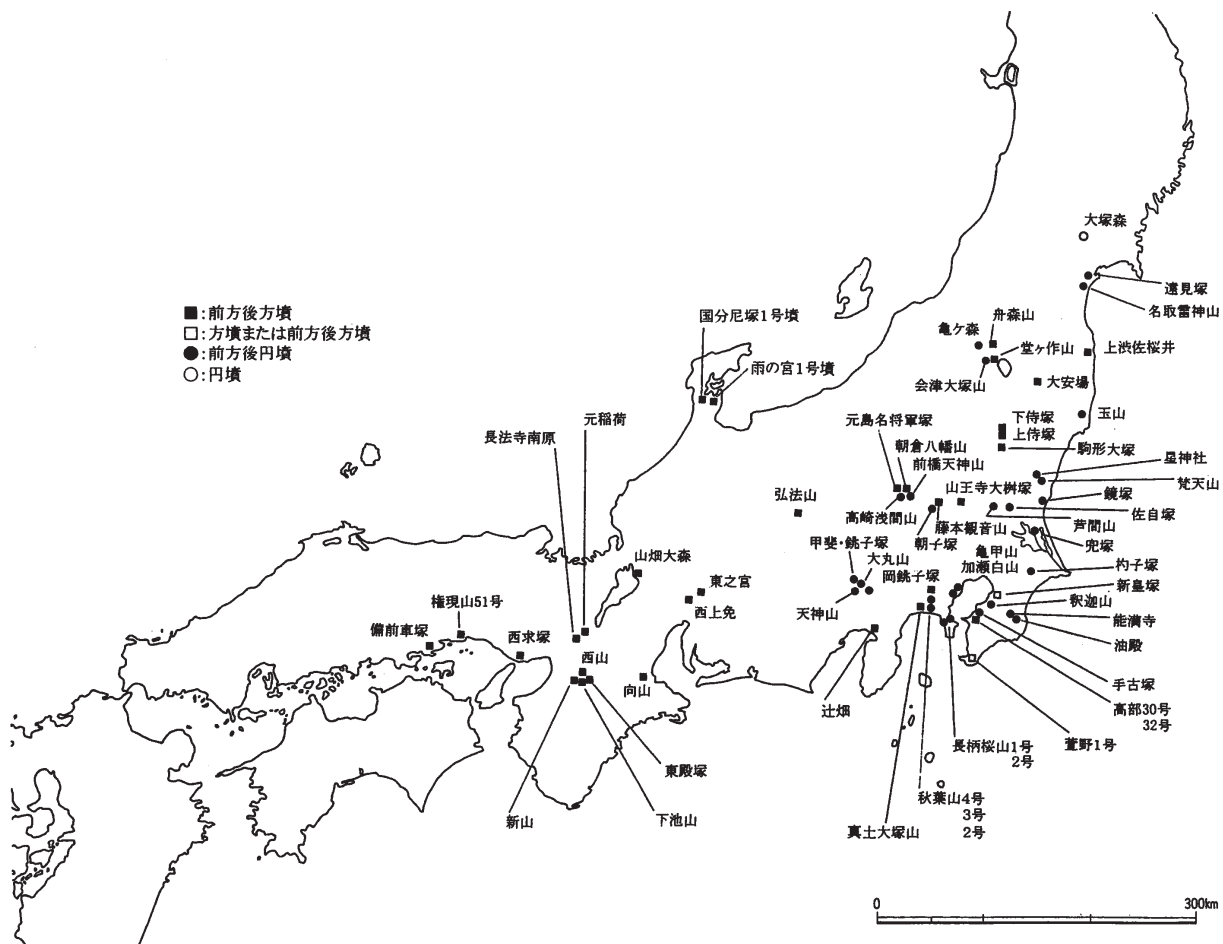
(1) 前期

前期では、墳丘長 180 m を超える前方後円墳は中枢域に限られ、墳丘長 190 m～300 m に達する巨大な前方後円墳が 18 基所在する。しかし、170 m 級の例は東国の甲斐（甲府市銚子塚古墳）・陸奥（名取市雷神山古墳）に 2 基あるのみで、これらが特別な意味をもって築かれたことがうかがえる。この 2 基はいずれも墳丘長 172 m で、前期の東国で最大規模を有する。銚子塚古墳は規模が傑出しているだけでなく、墳丘は 3 段築成で濃尾平野以東では極めて希な木製樹物をもつなど、東国の大首長墓の中にあつて特異な存在である。むしろ、中枢域の奈良盆地の主要古墳との間に多くの共通点があり、在地勢力の優勢さだけでは説明できない中枢域との特殊な関係が見出される。前期北限の前方後円墳である雷神山古墳が同規模で築かれているのは、銚子塚古墳と合わせた展開と考えられる。

一方、総数を見ると、3 地域がほぼ拮抗し、東国が最も多い。また、墳丘長 60 m 級の例では、西国・東国が 40 基前後であるのに対し、中枢域ではその半数に満たない。70 m 級でもほぼ同様の現象が見られる。60 m・70 m 級の前方後円墳は、列島各地の主要河川の流域や交通の要衝に築かれており、地域首長の基本単位となる前方後円墳と考えられる。これらの数は、地域ごとの基盤の数を示すと同時にそれらを築造し得た生産力や人口の指標にも成り得るであろう。大型前方後円（方）墳を墳丘長 60 m 以上とした所以である。

次に、大型前方後方墳の分布を見ると、明らかに東国に偏在する。また、これらの大半が前期前半に属していることも特筆すべき点である。規模を見ると、墳丘長 180 m の天理市西山古墳を最大の例として第 4 位までは中枢域に在り、東国最大の例（墳丘長 135 m の前橋市八幡山古墳）は第 5 位にとどまる。ところが、大型前方後方墳の総数では東国が中枢域の 2 倍であり、60 m 級では 3 倍になる。前期前半ではこれらの大型前方後方墳の被葬者群が東国運営の根幹を成し、中枢域にも同系の首長が存在して親交関係にあったとみえる（第 1 図）。

前期の大型前方後円墳では、西国・東国とも地域の基盤となる層が厚く広がり、60～70 m 級がいずれも 68 基で 56%・45% を占める。それらを統括するような墳丘長 100 m を超えるより広域の首長墓の数は 17%・23% で、統治体系として極めてバランスの良い構成を示している。東国の前方後方墳では、60～70 m 級が全体の 73% を占めており、地域の基盤となる首長層がさらに厚い。これに対して、中枢域の前方後円墳は 100 m 以上が 53% を占め、王陵級と目される 190 m 以上の例を除い



第1図 ヤマト王権中枢域の大型前方後方墳と東国の前期主要古墳

でも39%におよぶ。60～70m級は36基、27%にとどまる。

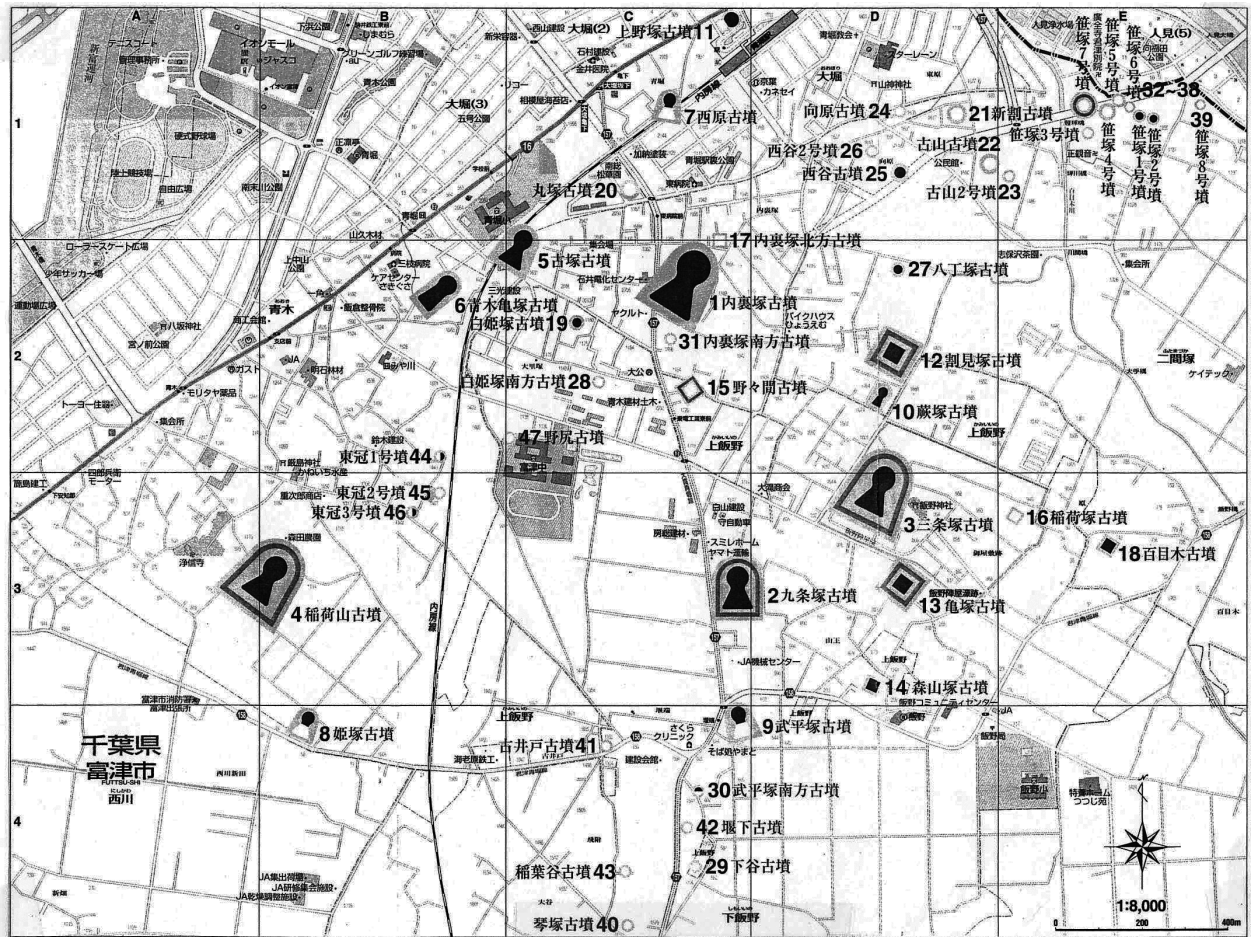
このように、墳丘長60m以上の前方後円墳の数は、古墳時代前期から西国・東国・中枢域で拮抗し、特に地域の基本単位と考えられる首長墓の数は西国・東国(173基)が中枢域(51基)の3倍以上になっており、ヤマト王権はその政権基盤の多くを西国・東国の諸勢力に依拠する構造であったことがうかがえる。

(2) 中期

中期の中枢域には圧倒的な規模の王陵が築造され、隔絶性を示している。墳丘長170mを超える例は西国・東国とも4例にとどまるのに対し、中枢域では29例を数える。中期中葉には、墳丘長512m(486m)²⁾の大仙古墳の平面規模が、秦の始皇帝陵を凌いで世界最大値に達した。

しかし、倭の五王の一人の墓と推定される石津丘古墳(現履中天皇陵、墳丘長365m)の段階では、ほぼ同時期の岡山市造山古墳(墳丘長360m)と規模が拮抗している。周濠・周堤帯を含めた規模は石津丘古墳に及ばないが、吉備(岡山県)の大首長墓の墳丘が王陵と同規模に造られていたことは他ならない。また、大型前方後円墳の総数では西国・東国が上回り、西国は中枢域の1.5倍に達している。特に注目されるのは、60m級の数が前期と大きく変わっていないことである(第2表)。60～70m級について見ると、西国83基・中枢21基・東国53基で、吉備を筆頭に西国の優位性がこの規模の動向にも表れている。

中期には朝鮮半島を経由した新技術の導入に王権の外交政策の主眼が置かれ、特に鉄製利器・武器・武具の入手は最優先課題であった。弥生時代以来半島との流通ルートをもつ西国の諸地域が存在感



第2図 内裏塚古墳群分布図(『内裏塚古墳群マップ』2008より)

を發揮したのは当然のことといえる。王権主導の鍛冶・窯業生産に先行して西国各地にはそれらの工人の拠点が築かれ、新技術の導入を始めている。この技術革新と東アジア情勢の緊張は、王権に軍事力の重要性を促し、前期以来の王権の拠り所であった「祭式」そのものに変化をもたらすことになる。

この間の東国大型前方後円墳の動向を見てみると、中期前葉を代表する大型古墳のひとつは、香取海圏の常陸の首長墓(石岡市舟塚山古墳、墳丘長 186 m)である。また同じ頃、上毛野が前代に傑出した甲斐を上回り、東山道の拠点を掌握した地域勢力として発展する。その端緒となった高崎市浅間山古墳(墳丘長 172 m)、太田市別所茶臼山古墳(墳丘長 165 m)は、いずれも盾形周溝をめぐらし、埴輪に中期的傾向をもつことなどから中期初頭に位置づけられるが³⁾、墳丘は前方部が後円部よりかなり低い前期的な形態で、埴輪にも前期の特徴を遺しており、より遡る可能性もある。それらに次ぐ中期前葉の典型的な埴輪と石製模造品をもつ例として、藤岡市白石桶荷山古墳(墳丘長 175 m)があり、やがて古墳時代を通じて東国最大の前方後円墳、太田市太田天神山古墳(墳丘長 210m)が築かれる。

一方、中期前葉と中葉以降ではその様相に違いが見られる。吉備・日向・常陸・上毛野・美濃・伊賀等の地域では中期前葉に前期を越える大型化のピークがあるが、中葉以降は墳丘長の上限が 150m 以下に縮小されている。この時王権中枢域では、墳丘長 425 m の巨大な前方後円墳・大阪府羽曳野市誉田御廟山古墳が築かれ、やがて世界最大級の王陵である堺市大仙古墳(墳丘長 486m)の造営に至り、その規模が頂点に達する。

菅田御廟山古墳の築造を境に王陵に迫るような規模の地方首長墓は見られず、中期中葉以降の王権中枢域は、東国をはじめとする列島各地に圧倒的な存在感を示しているといえる。しかし、百舌鳥・古市・佐紀から交互に輩出される王陵の動向を見ると、王権が特定の一族に限られていたわけではなく、中枢域の複数の勢力が政権を担っていた状況がわかる。各地の豪族の盛衰は、それらの中枢諸勢力との結びつきによるところが大きいと考えられる。中期前葉では常総・上毛野に比べ大型古墳が存在しなかった東京湾岸の上総に、中期中葉になるとこの時期の東国では最大の富津市内裏塚古墳（墳丘長 148 m）が築かれ、終末期まで首長墓級の古墳群を形成するのにもこうした中枢との結びつきを反映したものであろう。また、内裏塚古墳以後、この規模を超える例は地方になく、王権による造墓の規制がかかったと考えられる。

一方、中期中葉以降の帆立貝形古墳を見ると、東国では宮城県名取市大塚山古墳（墳丘長 95 m）をはじめ 60 m 以上の例が 14 ～ 15 基あり、西国は岡山県赤磐市朱千駄古墳（墳丘長 85 m）を最大に 11 ～ 12 基を挙げることができる。中枢域には大阪府堺市丸保山古墳（墳丘長 87 m）など 60 m 以上の例が 18 基前後あり、大型の帆立貝形古墳には地域差が見られない。また、大型円墳は岐阜県高山市亀塚古墳（径 70 m）をはじめ墳丘径 60 m 以上の例が東国に 7 基見られるのに対し、西国には例がなく、中枢域では奈良県大和高田市金比羅山古墳（径 95 m）など 5 基がある。さらに、大型方墳では中枢域に 1 辺 50 m 以上の例が 7 ～ 9 基あるが、地方にはなく、30 m 以上に枠を広げても中枢域 24 ～ 31 基・西国 8 基・東国 1 基という明確な差が見られる。このように、大型前方後円墳の築造に規制があった時期には、別の墳形・規模による系列が存在したといえるであろう。

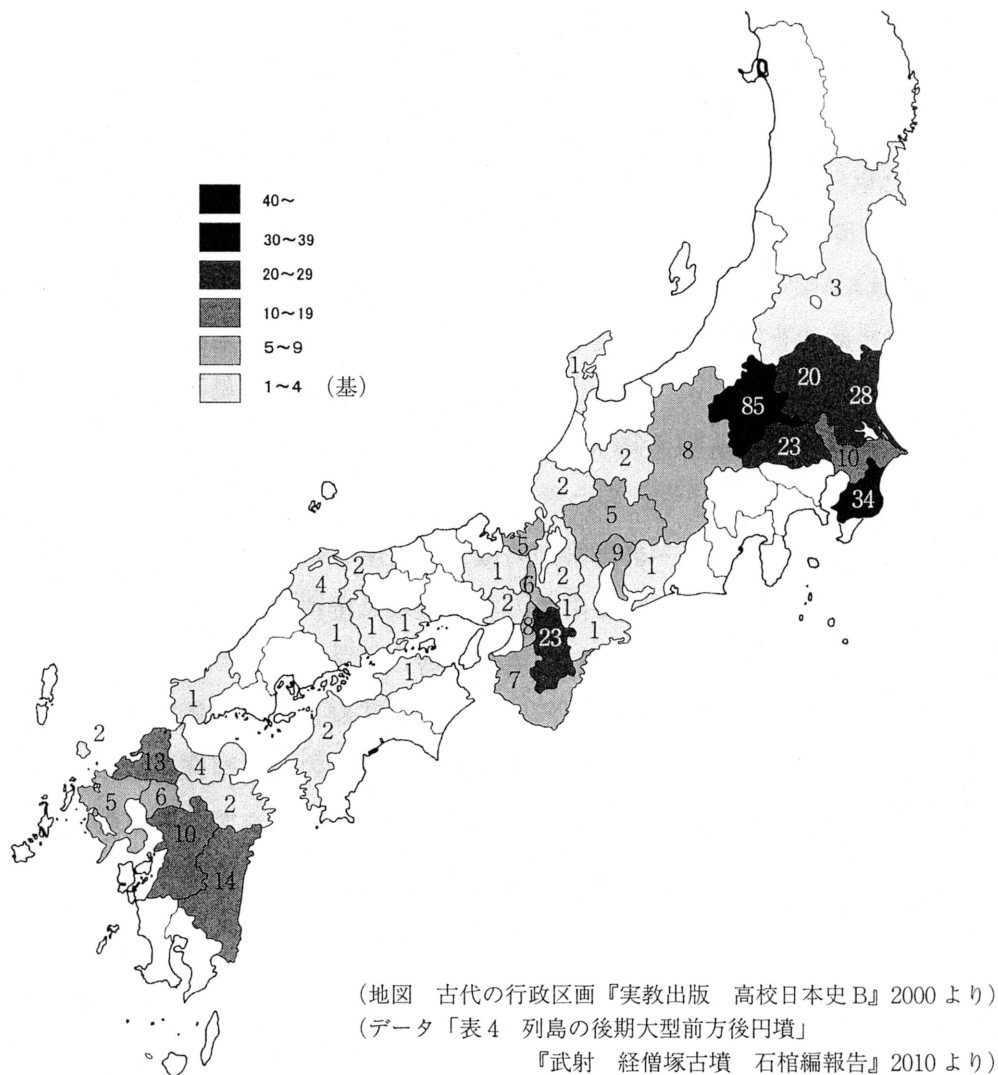
(3) 後期

王権中枢域では、橿原市見瀬丸山古墳（墳丘長 310 m）の築造を最後に、6 世紀後半には大型前方後円墳の築造を止め、急速にその規模が小さくなっている。やがて 6 世紀末には、古墳時代の象徴であった前方後円墳が中枢域で一斉に造られなくなり、まもなく西日本一帯で造営が停止される。主要古墳は大型方墳や円墳に移行し、大型古墳そのものの築造が規制されて、王陵・王族層以外の墓は規模を縮小する。ところが、関東地方では 6 世紀後半になって墳丘長 100 m を超える前方後円墳が初めて出現する地域もあり、大型古墳の分布図が塗り変わる。また、埴輪の樹立が隆盛するなど、王権中枢域を中心とする西日本とはかなり異なる動向が見られるのである。

大型前方後円墳の総数を見ると、西国 69 基・中枢 54 基・東国 235 基で、圧倒的に東国が多い。60 ～ 70 m 級では、西国 40 基・中枢 25 基・東国 145 基で全体の傾向がこの規模の動向にも表れている（第 2 表）。東国では、北武蔵などの新興の地も加えて内陸・海道の各地に大型前方後円墳が築造され、西国・中枢とは大きく異なる様相を呈してくる。さらに 6 世紀後半以降に絞ると、関東地方（相模・武蔵・上総・下総・安房・常陸・上野〈上毛野〉・下野〈下毛野〉）からなる古代の板東八国に相当する地域）に 65 基が確認され、畿内（中枢域）11 基の 6 倍に及んでいる（第 3 図）。

また、墳丘長 100 m 以上の大型前方後円墳は、関東地方に 33 ～ 35 基あり、畿内 17 基の 2 倍に達している。しかも、それらは畿内の大王や有力豪族の墓に匹敵する規模をもち、上毛野・高崎市観音塚古墳・綿貫観音山古墳、上総・木更津市金鈴塚古墳では、王族や中央の有力豪族の墓に迫る豪華な副葬品が出土している。この後期大型前方後円墳の造営に見える関東の特異性は、ヤマト王権のより北方への進出を背景とした政治的・軍事的基盤としての重要性によるところが大きい。また、関東各地の豪族がそれぞれ中央の有力豪族と結んで一定の領域を支配した構造を反映したものといえよう。この点で、関東の前方後円墳体系は後期に至って充実し、王権の思惑とは別により整備され強化されたといえよう。ただし、内陸と海道では様相に違いが見られる。

内陸の拠点である上毛野では、後期大型前方後円墳が小地域に分散して万遍なく分布し、それぞれ核となる古墳の規模も拮抗している。ところが、終末期の大型古墳は西部の総社古墳群に集約され、



第3図 列島の後期大型前方後円墳 (『墳丘長 60m 級以上、58・59m 含む』)

上毛野の頂点に立つ首長墓が現れる。これに対し、上総・下総・常陸では大型前方後円墳を築いた新旧の勢力は、再編されながらも後の郡単位に近い地域に終末期の大型古墳を造営しているのである。両地域に挟まれた下毛野・北武蔵では、特定の地域に後期の大型前方後円墳が集中し、終末期の拠点に再編される点でより上毛野に近い様相を示している。これは、『国造本紀』などの文献に見える毛野・下毛野・武蔵の大国造と上総・下総・常陸の小国造の様相を示唆する状況として注目される。

また、内陸部の上毛野・北武蔵では、5世紀後半に井出二子山・埼玉稲荷山の大型前方後円墳が築かれ、それぞれ後期大型前方後円墳群の先駆を成したのに対し、海道に沿った上総・下総・常陸では、5世紀後半に規模を縮小した前方後円墳が6世紀後葉～末葉になって息を吹き返したかのように規模を拡大している。

さらに、墳丘長 40m 以下の前方後円墳に注目すると、上総・下総・常陸が上毛野を上回る勢いで前方後円墳を築造する状況が展開し、上総・下総の現千葉県内の前方後円墳が 773 基 (2000 年) で全国で最も多いという数値は、後期の中小規模例の造営に起因する。常陸に隣接する下毛野もこの連鎖に加わっており、関東地方の 6 世紀後半以降の動向にも各地で異なる状況が内在している。一方、相模と南武蔵は、前期あるいは中期前半まで存在した大型首長墓が姿を消し、後期に至っても築造が途絶えている。また、帆立貝形前方後円墳の東京都世田谷区野毛大塚山古墳 (墳丘長 82 m) 以降、

大型前方後円墳の築造が見られない地域である。特に、相模はすでに中期から前方後円墳の造営に関して他地域とは異なる基準が用いられていたと考えざるを得ない状況である。これについては様々な見解が示されており（白石 2000、滝沢 2002、西川 2004・2007）、東国への門戸としていち早くヤマト王権の支配が浸透し、強力な地方勢力が形成されにくい地域であったことが考えられる。

3. 前方後円墳の理解と実像

1) 前方後円墳の出現をめぐる

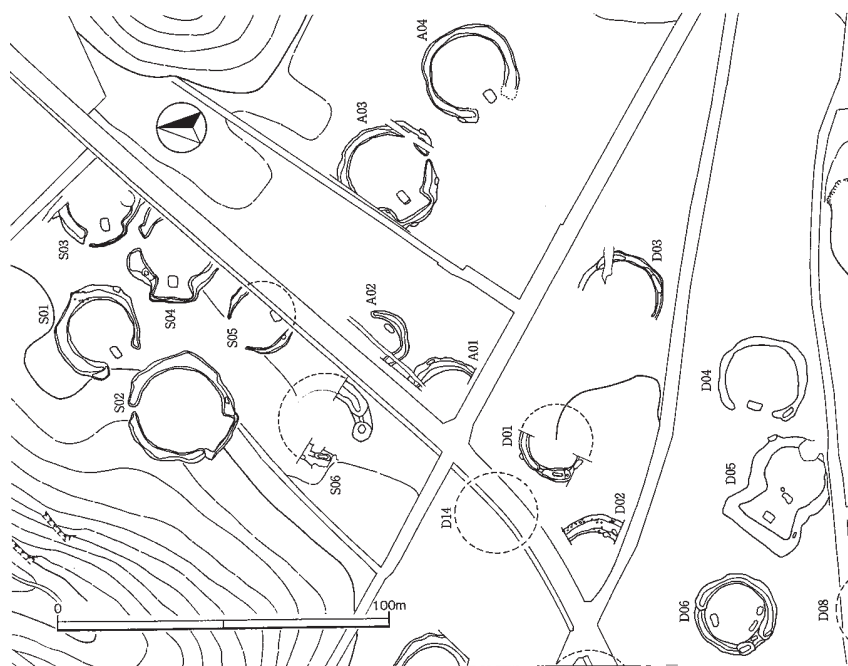
列島規模で古墳の出現を語る時、必ず名を連ねる地域に房総が挙げられる。それは、神門古墳群という出現期の大型前方後円墳3基が存在し、墳形のみならず埋葬施設と副葬品が明らかにされており、被葬者の性格や古墳の時期を知る有力な手がかりをもっていることに拠る。一方、ヤマト王権中枢域との対比では、大型前方後円墳出現の鍵をにぎる古墳（桜井市纏向石塚古墳など）の埋葬施設が不明なため、出土した土器の位置づけをめぐる未だに見解が分かれており、副葬された鉄鍬群の位置づけも、なお検証資料を待つ段階といえる。また、前期前半の東国の大型古墳は、その大半が前方後方墳で占められ、前方後円墳の定型化・大型化が顕著な西国とは対照的な一面がある。

そこで、王権中枢域以西と東国をつなぐ重要な調査例として、沼津市高尾山古墳・松本市弘法山古墳という神門古墳群に後続する2基の前方後方墳に焦点を当て、東国の前期中葉以前的大型古墳から出土した鉄鍬・銅鍬を中心に、西日本との対比を試みた（白井 2013）。弘法山古墳・高尾山古墳の鍬は、前期前半の古段階に位置づけられ、高尾山に神門4号墳の定角鉄鍬のような企画性の高さがうかがえるのに対し、構成の多様性と柳葉丸尻銅鍬の出現という点で弘法山により新相を見出した。

一方、桜井市ホケノ山古墳・長浜市小松古墳に見られる短頸部をもつ柳葉腸挟銅鍬と弘法山古墳例の柳葉丸尻銅鍬を比較では、弘法山例が定型化する柳葉丸尻系銅鍬につながる特徴を備え、弥生時代の系譜と異なる銅鍬の最も古い例ではないかと推定した。短頸部をもつホケノ山・小松古墳例は、定型化する柳葉銅鍬の鍬身に短頸部が加わった形態で、三角縁神獣鏡副葬以後の新段階に見られる岡山市浦間茶臼山古墳・東近江市雪野山古墳出土例につながる要素をもつと捉えた。高尾山古墳・弘法山古墳・ホケノ山古墳・小松古墳の4基の位置づけについては、鍬の系譜に注目した分析によって前期前半古段階の枠の中で、高尾山古墳・弘法山古墳がやや先行する可能性を示した。しかし、現段階では他の諸相の検証がさらに必要である。

古墳時代の始まりは、前方後円墳の出現に関わる激動の時代ともいえる。弥生時代中期後半から物流の拠点として大規模な集落を形成している関東地方は、弥生文化の墓制である東海系四隅独立型の方形周溝墓をいち早く採用して定着させた。古墳時代に入っても伝統的な方形の墳丘を首長墓に用いており、出現期～前期前半は前方後方墳と方墳の発達した地域である。むしろ、前方後円墳を採用した神門古墳群が特殊な存在であったといえる。このように、ヤマト王権の前進基地的な側面と地域の伝統が維持された複合的な構造をもつことが古墳時代を通じた関東地方の特性であり、出現期～前期の前方後円墳は前進基地の象徴であったといえよう。

2) 前方後円墳の理解



第4図 千葉県四街道市物井古墳群の墳形

『前方後円墳集成』には、近年の発掘調査によって明らかになった各地の前方後円墳が収録され、列島の多様性が反映された。この成果には、王権中枢域であった近畿地方を中心とする放射状の動向だけでは説明しきれない古墳時代社会の側面が表れたといえるであろう。それが最も顕著に表れるのは後期の東国、とりわけ関東地方である。

近畿地方を中心とする西日本の後期群集墳は、前方後円墳や大型円墳・方墳と多数の小円墳によって構成される場合と極めて等質的な多数の小

円墳によって構成されるものがあり、前者については大型墳を盟主とした群構成と見られるが、後期後半には前方後円墳そのものが造られなくなる。後者は群形成の核となるような大型墳を始めから含まず、大型墳とは明らかに墓域を異にしている。このような群集墳の様相は、中期後半から後期前半にかけて急成長した新たな有力者層の成立に起因し、そのような社会的変化に対処しようとする王権によって官僚と化した在地首長層と新たな有力者層の分離が進んだ結果を反映している。

しかし、関東における後期群集墳には最後まで核となる大型墳が存在し、前方後円墳・帆立貝形古墳を中心に形成された古墳群が方墳の導入期まで存続している。特に小規模な前方部をもつ墳丘長20～30mの帆立貝形古墳が円墳と共に群在するのは特徴的である。前方後円墳－帆立貝形古墳－小規模な円墳、あるいは方墳によって構成された古墳群は墳形・規模に一定の格差をもっており、内部施設の構造や素材の共通性に密接な関係がうかがえる。

このような群構成の特徴は、核となる古墳の被葬者と構成員に紐帯が保たれた旧来の統治形態をより広範に実現したことを示しているといえよう。後期になって大型化した首長墓には、前方後円墳を採用しており、それを頂点にした各地の古墳群を見ると、関東における前方後円墳体系は後期に至って完成したといえる。これは王権による関東重視の懐柔策だけで説明することのできない、社会的背景によるものと考えられ、古墳時代前期、さらに弥生時代後期に遡って維持された地域的紐帯とそれを支えた中堅層の安定した成長を重視する視点が必要であると考ええる。その中堅層は弥生時代後期の方形周溝墓に系譜を引く中小規模古墳群の被葬者層であり、彼らを基盤にした在地首長こそ、古墳時代を通じて60～70m規模の前方後円墳を築造し得た首長層であった。東国で後期に急増する60～70m規模の前方後円墳の多くは、新興の有力者層から輩出された考えられるが、旧来の安定した統治体系が新興層をも取り込んだ地域統治を可能にしたのでないかと思われる。

本稿では、墳丘長60m以上の大型前方後円墳を地域別に数値化し、古墳時代の統治体系を支えた60～70m規模の首長層に着目した。前期から中期にかけてその数は安定し、明らかに中枢域に薄く地方に厚く分布する。これらの首長層が王権の動向に左右されることなく、在地の統治体制を維持していたところにヤマト王権の支持基盤を見い出せる。

後期には、東北進出という王権の命題に呼応した関東地方で前方後円墳が量産される。100 m級の大型から20 m以下の小型まで前方部をもつことに意義があり、格差を求める。ここに至って、前方後円墳の本質が見えて来るのではないだろうか。王権の支配体系の象徴であった前方後円墳の意義は、王権に向けたものではなく、在地統治の権威の表象であったと理解できる。また、前期の前方後方墳のように、前方後円墳とは系譜を別にした縦の体系が存在する。中期には墳丘径100級の大型円墳があり、円墳・方墳・帆立貝形古墳それぞれの体系を前方後円墳と切り離して分析することも必要であろう。

註

- 1) 大阪湾の北岸域(旧摂津)と若狭湾の沿岸域(旧丹後・若狭)は、前期から後期に至るまで3段築成で葺石・埴輪を備えた大型前方後円墳が存在し、埋葬施設・副葬品の内容からもヤマト王権の経済・外交を支えた港湾拠点として王権の管轄下にあったと考えられる。代表的な前期古墳には神戸市五色塚古墳(194 m)、京丹後市神明山古墳(墳丘長210<190> m)・網野銚子山古墳(201 m)・蛭子山古墳(145 m)、中期には福井県三方上中郡若狭町上ノ塚古墳(100 m)・西塚古墳(72 m)、後期には同町下船塚古墳(85 m)・上船塚古墳(77 m)がある。
- 2) 大仙古墳の墳丘規模については、現況の測量図によって486 mと公表されているが、『書陵部紀要』第52号所収の「仁徳天皇百舌鳥耳原中陵の墳丘外形調査及び出土品」に示された墳形地形測量図(第3図)および墳丘断面図(第2図)に拠って、前方部南角の周濠水面下16.7 mの墳丘裾部を算出し、墳丘長復元値を512 mとした。なお、この復元値算出では、第1段斜面の傾斜が第2斜面と一定であると捉えている。
- 3) 若狭徹2011「中期の上毛野」『古墳時代毛野の実像』(季刊考古学別冊17)、右島和夫・徳田誠志・徳江秀夫1999「古墳時代の高崎」『新編 高崎市史』資料編1、橋本博文1996「別所茶臼山古墳」『太田市史』通史編一自然・原始古代一による。

引用・参考文献

- 近藤義郎編1991・1992・1994『前方後円墳集成』全5巻 山川出版社
- 近藤義郎編2000『前方後円墳集成』補遺編 山川出版社
- 白井久美子2012「古墳の様相」『研究紀要27』古墳時代中期の房総―中期的要素の波及とその評価―(財)千葉県教育振興財団
- 白井久美子2012「大型前方後方墳出現の新知見」『考古学論攷1』千葉大学考古学研究室
- 白井久美子2013「関東の後期・終末期古墳」『古墳から寺院へ』―関東の7世紀を考える― 六一書房
- 白井久美子2013「東国古代前期前半の畿」『西相模考古』第22号 西相模考古学研究会
- 白石太一郎2000「畿内における大型群集墳の形成過程」『古墳と古墳群の研究』塙書房
- 滝沢誠2002「考古学からみた古墳時代の焼津―志太平野の前期・中期小型古墳をめぐって―」『焼津市史研究』第3号 焼津市
- 田中新史2008「点景をつなぐ―古墳踏査学による常総古式古墳の理解―」『土筆』10 土筆舎
- 中司照世2010「前・中期の大首長墳」『武射 経僧塚古墳 石棺編 報告』経僧塚古墳発掘調査団
- 奈良県立橿原考古学研究所編2001『大和前方後円墳集成』奈良県立橿原考古学研究所
- 西川修一2007「相模の首長墓系列」『武蔵と相模の古墳』(季刊考古学別冊15) 雄山閣
- 陵墓調査室 2001「仁徳天皇 百舌鳥耳原中陵の墳丘外形調査及び出土品」『書陵部紀要』第52号 宮内庁書陵部